

李贄の「邇言」論

阿部亘

「舜は問うことを好み、邇言を察することを好む」（『中庸』）——この言葉について、明の万暦中期に活躍した思想家、李贄（1526～1602）はその生涯において、少なくとも二度深く論じている。その一度目は、万暦十二年（1584）の友人耿定理の死をきっかけに始まった、その兄耿定向との論争のなかで、耿定向の弟子に書き送った書簡においてであり、二度目は万暦二十五（1597）年に編纂された劉東星との講学の記録『道古録』においてである。前者は彼一流の卑近な表現——彼の所謂「邇言」——によって、耿氏一族の若者たちを教えたことへの釈明、後者は経書の釈義と、それぞれ執筆動機を異にしているが、いずれも舜が民衆の言葉に耳を傾けたという伝承をめぐって、その解釈を示している。

では、彼が「邇言」伝承に託したものはなんだったのか。その思想的位置づけは如何なるものだったのか。本発表はその分析を通じて、李贄の「聖人」および、学問なき人々への態度、さらには自己と他者に対する捉え方を明らかにしようとするものである。分析にあたっては、①舜＝聖人の「邇言」認識、②「邇言」の性格づけ、③李贄と「邇言」の関係といった側面に着目する。